

ケルン市長、高等学校を訪問

山崎 彰

「グーテン・ターク」。小声であいさつをしながら手をさし出す小柄な青年。大きな手をさし出し青年の手を握りしめる大柄な外国人。にこやかな微笑をうかべたこの外国人はケルン市長。対する青年は本校の図書委員長の柿本直史君。なごやかに手を握り合う二人をかこんで市長を歓迎する図書委員たち。そして校長、教頭……。そのまわりを忙しげに走りまわり写真を撮る新聞記者たち。

*

秋も終わりにちかい十一月二十四日のこと、一限目の授業を終えて図書館にもどろうとしていた私に、うしろから追いかけてきた柿本君が、「先生、今日ケルン市から僕に会いにやってくるそうです。」と言ったのを聞いて、私はびっくりしました。三限目の授業が終わった時点で、訪ねてくる

人物がケルン市長自身だと知り二度びっくり。あわてふためきながら走りまわる先々で、すでに歓迎の準備がすすめられているのを知り、ホッと胸をなでおろすまでもなく、今度は取材にやってきた新聞記者にかまってしまいました。

昼休みの時間、柿本君ならびに図書委員の記者会見？。

「ケルン市長が、わざわざ柿本君に会いにくるようになった事情を話してください。」新聞記者の質問に対して柿本君は、「十月に行われた岩倉祭争奪巻に、図書委員会としてはじめて参加しましたが、そのときに姉妹都市の資料展示もやったのです。これがことのはじまりなんです。」

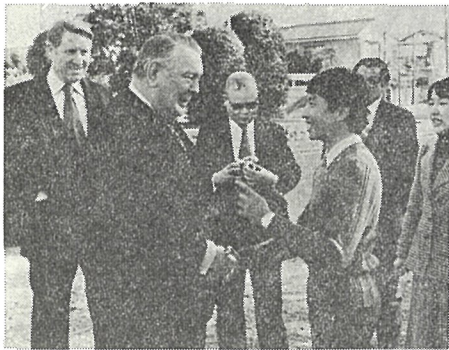
*

昨年の六月のはじめころ、図書委員たちの間で委員会として岩倉祭に参加してみよ

うではないかという話が出ました。岩倉祭参加が正式に決まって以来、図書委員たちはいろいろと企画を出し合い、相談していましたが、その一つに、京都市の姉妹都市の資料を集め展示してみようという企画があったのです。全体的な構想が決まったのは六月の末、試験もままないころのことでした。

試験の終わった翌日、恒例の図書整理が図書委員たちによって行われました。仕事が終わったあとで、岩倉祭参加の準備のために、夏休み中に二、三度集まろうということが決まり、七月二十四日に第一回目で、国内の諸施設と姉妹都市に対する資料提供の依頼状づくりの相談がなされ、依頼状の文案は柿本君が書いてくることになりました。

七月二十九日、二十六人の図書委員のほとんどが集まり、作業が行われました。姉妹都市と国内の諸施設に対する依頼状の清書とあて名書き、それに本校生徒の読書状況の資料づくりなどの仕事が各委員の分担で進められました。図書委員会の活動費の關係上、郵送料をできれば依頼先で負担してほしいといったムシのいい依頼状でした。委員たちは、こんなことで果たして資



ケルン市長と握手をする柿本図書館委員長

料を送ってもらえるだろうかとか、岩倉祭までにまにあうだろうかとか、あれこれと期待やら心配をしながらもたのしそうでした。

夏休みも終わり、二学期がはじまると、図書委員たちの元気な顔が図書館に集まってきました。すでに八月のうちから届きはじめていた国内の諸施設からの資料は、毎日のように送られてきましたが、姉妹都市からの資料はなかなか届きません。九月もなかばを過ぎたころに、ようやくフィレンツェ市の資料が届きました。立派なポスター

が六枚。心待ちにしていた委員たちの喜んでいる顔をみながら、私も本当によかったな、と大喜びいたしました。それから数日たって、もう一つ横文字の資料が送られてきました。ケルン市からです。フィレンツェ市からと同様に立派なポスター、そして日本語とドイツ語で書かれたケルン市の観光案内用のパンフレットなどでした。その後パリ市からも送られてきましたが、定期的に遅れてしまい、岩倉祭にまにあったのは、結局この二都市だけですが、なんとか姉妹都市の展示をやることができました。

岩倉祭が終わったあと、中心になって活動してきた委員たちの間で、せめてお礼状ぐらいは出そうではないかということになりました。柿本君が文案をつくり、各委員が手わけをしてタイプを打ち、三都市にお礼状を発送しました。十月ももう末のころだったと思います。

*

「ケルン市長が、僕にぜひ会いたいというのですが、お礼状を出したのがたいへん喜ばれたらしいんです。あたりまえのこととをただけなんです……。」ケルン市長の突然の本校訪問を取材しようとしてやってきた新聞記者たちの質問をうけて、テ

レクサそうに答える柿本君。大きな手のぬくもりに友好を感じつつあいさつを交わした図書委員たち。市長から贈られた記念のバッジ、ケルン市のスケッチ集、そしてケルン市警察音楽隊によるレコード、それらをかこみながら語り合う生徒たち。自分たちも何か市長に贈ろうではないかと準備をしている委員たち。これらの一コマ一コマが、生徒たちにとって高校生活における貴重な経験として、また楽しい思い出として残ることでしょう。

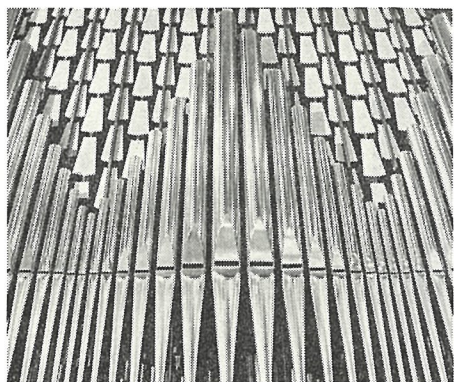
ところで、このような経験と思い出をつくり出すきっかけとなったのは、「高校生生活最後の年を充実したものにしたい」という柿本君ら三年生の委員の願いだったのです。柿本君は、この願いを図書委員会の活動のなかに見いだそうとしたのです。かれの積極的な活動と問題提起、そしてそれらをつうけて活動した図書委員たち。かれらの日常的な活動の実りの一つとして、ケルン市長が本校を訪問してくれたことを心から喜びながら、この記事を終わることにいたします。

(高等学校教諭・社会)

神学館のパイプオルガンについて

石井裕二

現在の神学館は一九六三年の竣工であるから、もう十五年も前のことになる。そのなかのチャペルは三階、四階吹き抜けて形状が良く、パイプオルガンには絶好の条件をいくつも備えている。しかし、そこにパ



イプオルガンを設置したいという願望が具体的に生じたのは竣工後のことであつたらしい。その翌年から募金に取りかかり、昨年暮れにようやくその実現を見た。思えば長い年月であつた。関係諸氏に感謝の意を表したい。

でき上がったパイプオルガンは、十二ストップ、約八〇〇本のパイプから成り、パイプオルガンとしては比較的小さいものであるが、チャペルの容量に見合った適切な規模のものであるらしい。製作は、いろいろ検討したすえ、西独ハンブルクにあるルドルフ・フォン・ベツカラート・オルガン製作所に行ってもらつた。同社は著名な大手のオルガン・メーカーであるが、どうしたものか、これまでわが国には同社製のものが一台も入っていない。(現在、東北学院大学が発注して、かなり大きなものを建造中)そ

んなこともあつてか、同社ではずいぶん力を入れようで、りっぱなオルガンができ上がった。デザインは同社が神学館チャペルの構成を示して競争設計をやらせて選んだとかで、さすがに周囲と良く調和した美しいものであるし、すえつて最終の音質調整は、わざわざ西独から同社の技師がかけつけて、何日もかけておこなつた。試聴してみると、音質は北ドイツ特有のきびしい格調を基本としながら、高音域に美しい輝きがあつて、ほのかに暖か味を感じさせるという、さすがにみごとなものである。

(ついでに、チャペルの内部構造も音響効果に大きく影響があるということで、昨年夏から入念に改装し、一段と引きしまった雰囲気になつた)

パイプオルガンをどう運用していくかはこれから検討して企画していくことになるが、チャペル・アワーその他の公的行事、授業などにおける使用のほか、広い対象に音楽を通して情動的にアプローチすることを旨として演奏会・合奏会なども組み入れていくことができればよいと考えている。

(大学神学部長)